

〈Resignation〉による森鷗外の創作力

——「鷗外文話」から史伝まで——

林 正子

(2022 年 11 月 21 日受理)

The Creative Power of Mori Ōgai through “Resignation” : From “Ōgai Bunwa” (Ōgai’s criticism) to His Historical Biographies

HAYASHI Masako

はじめに

森鷗外 (1862～1922) の随筆「予が立場」(『新潮』第 11 巻第 6 号 1909 年 12 月) で用いられたドイツ語「Resignation」は、夏目漱石 (1867～1916) 晩年の「則天去私」を連想させる、鷗外の心境を表現する言葉として知られる。訳語として当てられる「諦念」という日本語では表現しきれないとされ、鷗外の作品中、時にフランス語「résignation」と表記される「Resignation」は、おもに鷗外の陸軍軍医総監・陸軍省医務局長在任時代 (1907～1916) と重なる明治末年から大正期にかけての「豊熟の時代」の作品に見られるが、文学活動の初期から最晩年にいたるまでを貫流する鷗外文学の基調を示す鍵語であると考えられる。本稿では、自明のようでありながらその実質は必ずしも分明ではない鷗外の「Resignation」の内実に迫ることを意図している。

『しがらみ草紙』第 20 号 1891 年 5 月) に「鷗外文話」の総題のもと掲載された 11 編、うち 6 編の初出は、「舞姫」(『國民之友』第 6 巻第 69 号新年附録 1890 年 1 月)、「うたかたの記」(『しがらみ草紙』第 11 号 1890 年 8 月) と同年明治 23 (1890) 年の『國民新聞』『日本之文華』に掲載されている。これら鷗外の創作活動初期の文章「鷗外文話」から、大正 5 (1916) 年 4 月陸軍省辞職、予備役編入後に発表された「澀江抽斎」(『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』1916 年 1 月～5 月) はじめ一連の史伝作品にいたるまで、鷗外の「Resignation」の心境は通底していると考えられる。

「鷗外文話」「其十、小説中人物の模型」の「わが小説を作るときは、いまだ先づあ

る理想を得て業に就きしことなし。われは必ず先づ實在の人物を得るなり。さてこの人物に適ふやうなる性質次第に集まりて、遂にその一身に融合す。われ生れながらにして空に憑りてものを見出す能少し。故に先づ堅き地を得し上ならでは、自在に運動すること能はず。」（『鷗外全集』第22巻 493頁 以下、下線および太字は引用者）などの記述を糸口として、鷗外の「Resignation」による創作活動の淵源と諸相を考究することをめざしたい。

I. 鷗外文学における Resignation

鷗外文学において「Resignation」という言葉が強調して用いられたのは、「予が立場」（『新潮』第11巻第6号 1909年12月 『鷗外全集』第26巻）においてである。1909年11月7日（日）付の鷗外の「日記」に、「新潮の中村武羅夫來れるに Resignation の説を書きて遣す。」（『鷗外全集』第35巻 461頁）とある、原稿を受け取った新潮社の記者・中村武羅夫の「森林太郎氏談」（『新潮』第11巻第6号 1909年12月）や同じく中村の著作『明治大正の文學者』（留女書店 1949年）の記述によれば、「鷗外は中村の目の前で自ら「森林太郎君の談話 中村武羅夫記」と題記して即座に鉛筆で無罫の洋紙十一枚に認めて渡した」（『鷗外全集』第26巻「後記」647頁）とされている。

私の心持を何といふ詞で言ひあらはしたら好いかと云ふと、Resignationだと云つて宜しいやうです。私は文藝ばかりではない。世の中のどの方面に於ても此心持である。それで餘所の人が、私の事をさぞ苦痛をしてゐるだらうと思つてゐる時に、私は存外平氣であるのです。勿論 Resignation の状態といふものは意氣地のないものかも知れない。其邊は私の方で別に辨解しようと思ひません。（全集 393頁）

私は田山君のやうに旨くないと云はれても、實際どうでもない。田山君も、正宗君も、島崎君も私より旨くて一向差支がないやうに感じてゐます。それは私の方で旨くても困りはしません。併しまづくても構ひません。ちつとも不平がない。諸君と私とを一緒に集めて、小學校のクラスの席順のやう並ばせて、私に下座にすわつてお辭儀をしると云ふことなら、私は平氣でお辭儀をするでせう。そしてそれは批評家の嫌ふ石田少介流とかの、何でもちいつと堪へてゐるなんぞと云ふのではありません。本當に平氣なのです。

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

私の考えでは私は私で、自分の気に入った事を自分の勝手にしてゐるのです。それで気が済んでゐるのです。人の上座に据ゑられたつて困りもしないが、下座に据ゑられたつて困りもしません。

かういふ心持は愚癡とか厭味とかいふ詞の概念とは大へんに違つてゐると信じ
てゐます。いつか私は西洋にある詞で、日本にない詞がある、随つてさういふ概念
があちらにあつて、こちらにないと云ふやうな事を話したことがありました。縦令
兩方に其詞はあつてもそれが向うでは日常使はれてゐるのに、こちらでは使はれて
ゐないといふ關係もあるのです。これは確に思想の貧弱な兆候だらうと思ふのです。
(全集 392 頁)

ここに記された「西洋にある詞で、日本にない詞がある、随つてさういふ概念があちらにあつて、こちらにないと云ふやうな事を話したことがありました。」というのは、「當流比較言語學」（『東亞之光』第4巻第7号 1909年7月）『鷗外全集』第26巻）の「或る国民には或る詞が闕けてゐる。何故闕けてゐるかと思つて、よくよく考へて見ると、それは或る感情が闕けてゐるからである。」（全集 338 頁）に対応する。「當流比較言語學」において鷗外は、ドイツ語の「Streber」（努力家・野心家）という語に相当する日本語はないと、自然主義文学に対する皮肉をこめて説明しているのである。

また、「Resignation」がフランス語表記で登場する作品として、「宿場の医者たるに安んじてゐる父の résignation の態度が、有道者の面目に近いといふことが、臃氣ながら見えて來た。」と記された「カズイスチカ」（『三田文学』1911年2月 『鷗外全集』第8巻）がある。これは熊沢蕃山の言葉「志を得て天下國家を事とするのも道を行ふので有るが、平生顔を洗つたり髪を梳つたりするのも道を行ふのであるといふ意味の事が書いてあつた。」（全集 7 頁）とあるように、熊沢蕃山の言葉によって啓発された内容であり、鷗外は熊沢蕃山の詞をかりて「Resignation」を定義づけているのである。

さらに、鷗外による翻訳「ギョオテ傳」とともに『ファウスト』の附冊となる「ファウスト考」（富山房 1913年11月 『鷗外全集』第13巻）にも「Resignation」が登場する。「第十二章 離合」「壹 別れたる間のファウスト、森と洞」「一 獨言」の次のような記述である。

獨言の根本思想はスピノザ主義 (Spinozismus) である。激情と受苦とを凌いで、諦念 (Resignation) に入る。神を愛するものは神に愛せられようとはしない。

(中略)

スピノザの教によれば、世界の根元は「皆一」(das All-Eine) である。それは永

遠に次第に發展して行く。その箇々の物を想像 (Imagination) で領略することは出来ないが、その全體を悟性で觀得することが出来る。それが直觀知識 (Scientia intuitiva) である。皆一は轉變して息む時がない。ヘラクリトス (Heraklitos) の皆流 (Pantarei) である。

ギョオテの應用したスピノザ主義によれば、宗教は世間を脱出するにある。箇々の諦念に代ふるに全體の諦念を以てする。それをギョオテはスピノザの教が吹き送る平和の空氣 (Friedensluft) と稱してゐる。(全集 161～162 頁)

また、「ファウスト考」「第十二章 離合」「壹 別れたる間のファウスト、森と洞」「二 對話」には、「對話は諦念に住するファウストと誘惑を事とするメフィストフェレスとの對話である。」(全集 162 頁) というように、「諦念」という言葉で表現されている。

『ファウスト』におけるスピノザ (Baruch De Spinoza 1632～1677) 主義は、直接グレートヘンとの恋愛に関連はない。ファウストが最後に人道的國土經營の努力に斃れ、神の愛に救済されるという「キルヘルム・マイステル」風の「Arbeit 勞作」尊重主義とも直接の関係は希薄である。また、「キルヘルム・マイステル」の「諦念」は、スピノザの「諦念」から影響されており、「諦念」とともに「Arbeit 勞作」を立て、むしろこれを最後の目的として、「諦念」はそれに至る道のために必要なものであると見ている。すなわち、鷗外の「Resignation」は、スピノザのように「諦念」を直ちに神に結びつけて、安心立命の境地を得るという意味とは異なっていると言えるのである。

さらに、「伊澤蘭軒」(『大阪毎日新聞』1916 年 6 月 25 日～1917 年 9 月 4 日、『東京日日新聞』1916 年 6 月 25 日～1917 年 9 月 5 日 『鷗外全集』第 17 卷)「その百五十一」には、蘭軒の七言絶句「偶成」に表われた蘭軒の心境が、「人間不平の事が多い。少壮にして反發力の強いものは、これを鳴らすに激越の音を以てする。蘭軒は既に四十七歳である。且蹇である。これに応ずるに忍辱を以てし、レジニアションを以てする外無い。」(全集 327～328 頁) と片仮名で記されている。

蘭軒の七絶「自笑」においても蘭軒の「レジニアション」の心境が表現されており、鷗外は「Resignation」を「忍辱」という仏教語で翻訳している。中村元監修『新・佛教辞典』(誠信書房 1962 年)によれば、「忍辱」とは「心をかき立てることなく、よく平静に保ち他から加えられる諸の苦惱・苦痛・侮辱等を耐え忍ぶこと」、「仏教ではこの徳目は大いに尊ばれて、特に大乘仏教では重要視して、菩薩が必須すべき修業の徳目としている」。すなわち、「耐え忍ぶ」ことは決して否定的なものではなく、むしろ肯定的な意味として理解することが可能であり、鷗外は蘭軒に仮託して自らの

「Resignation」を標榜したと言えるのである。

Ⅱ. 鷗外 Resignation に関する先行研究・評価

前項では、鷗外の「Resignation」と記されている心境が、具体的に作品にどのように表現されているかに注目した。一般的に「Resignation」に対応する日本語としては「諦念」が挙げられる。鷗外文学に関する「諦念」論の大著、岡崎義恵『鷗外と諦念』（宝文館出版 1969 年 12 月）には、その「諦念」の意義について次のように論じられている。

鷗外の心境を「諦念」といふ語であらはすことは、今日ではもはや常識的になつてゐると云つてもよい程である。しかしその「諦念」の意味については、なほ様々の説をなす者がある。鷗外における「諦念」は、漱石における「則天去私」ほど、作家の理想を全面的にあらはすものともいへず、又その晩年における到着點を示す語であるともいへない。けれどもまた一面からいふと、「則天去私」が漱石の書いた文獻の上に残らず、ただ門人知友の間に傳へられるところによつて知り得るに留まるのに反し、「諦念」の方は鷗外がかなりその意味を書き残してあるのであるから、直接の資料を控へてゐるといふ點で、この語を重く視る事が出来る。我々は直接に鷗外からこれについて聴き、その意味を明かにすることができるやうに思ふ。それにも拘らず、この語がなほ研究の課題を與へるのは、却つて資料が豊富にあり過ぎるからであるとも云へないことはない。ところがこれまでの研究家はその資料を博搜し、實證的に吟味を施すことをせずして、鷗外像を自身にこの語の中から作り出してゆかうとしたから、その意味が十分わからなかつたのではないかと思ふ。

(266 頁)

また、短編小説を中心に鷗外に私淑した三島由紀夫による『日本の文学 2 森鷗外 (一)』（中央公論社 1966 年 1 月）「解説」には、次のような「Resignation」の用例が見られる。

超人の肖像画のかたわらには、もちろん人間的な肖像画も描かれる。鷗外の生活上の苦闘、当時の権力者との関係、家庭内の悩みなども、研究家によっていろいろ解明される。しかしその孤独な、ひたすら忍苦に耐えた、resignation（諦観）の境涯も、逆に「超人鷗外」のイメージを強めるばかりであつた。（531 頁）

ペシミズムは臆病であっても、忍苦は勇気である。鷗外が生きた時代の病弊は、そのまま今につづいているわけではないが、いつの時代にも、英雄的な花々しい積極的な行動精神と見えるもののうちに、時代に対して臆病な卑怯者の心が隠れていることがあり、鷗外は、少なくとも、そういう卑怯者ではなかった。彼の **resignation** とは、最後まで持場を放棄しない人の、平静さの勇気と、心の苦さとを、一つ言葉で語ったものと考えてよいのである。（542 頁）

さらに、小堀桂一郎『森鷗外 日本はまだ普請中だ』（ミネルヴァ書房 2013 年 1 月）には、ドイツ文学者としての造詣が生かされた次のような記述がある。

「予が立場」で説かれてゐる **Resignation** は、森自身の〈意氣地のないものかも知れない〉といふ説明に引かれて、とかく「諦念」「あきらめ」といふ消極的な方向に解される傾向があるが、實は「達観」と譯す方がよい、或る逞しさを具へた行動格率に見えてくる。曾て斯道の先進達を追ひ上げる立場に在つた者は、やがて自分と似た意志と力を有する後進によつて追はれ、追ひ越される位置に立つ。それでよい。それが世の慣ひである。この運命を甘受する心で、自分は現在自分の爲すに適した事を爲すのみである一。（410 頁）

また、清水孝純「**Resignation**（レジニアシオン）」（平川祐弘『森鷗外事典』（新曜社 2020 年 1 月））にも、鷗外の心境の表現としての「**Resignation**」が次のように論じられている。

Resignation は漱石の「則天去私」と並べて、鷗外の心境を表わしたものとしてよくあげられる。日本語にすれば諦念と訳される。しかし則天去私が漱石最晩年のものであるのに対して、鷗外が「予が立場」として **Resignation** をあげたのは明治四十二（一九〇九）年十二月で、なお意気盛んに活躍していた頃のことだ。

（中略）「予が立場」は当時の文壇において勢力を占める自然主義作家を念頭に、独立自尊己が道を行く鷗外の、心境といわんよりはむしろ決然たる覚悟なのだ。

（659 頁）

では諦念という日本語ではあらわせないというこのドイツ語はどういう意味を持たされているのか。たとえば、ショーペンハウエルでは最高度の意味を持つ。

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

「諦念こそ、あらゆる徳と聖の究極の目標であり、いや、そのもっとも内奥の本質であり、また世界からの解脱である」(die Resignation, welche das letzte Ziel, ja das innerste Wesen aller Tugend und Heiligkeit und die Erlösung von der Welt ist.) (ショーペンハウエル『意志と表象としての世界』西尾幹二訳、世界の名著 6)。日本語では、人生に対する一つの処し方に留まるこの言葉が、ショーペンハウエルにおいては徳と聖の本質をなすもので、そこに至ったとき、人間は苦悩から完全に解放されるというのだ。鷗外にとってはこの書物は周知のものだったから、諸処で述べられているこのドイツ語の意味は十分承知の上で使ったものだろう。さらに興味深いことには、鷗外所有のシュヴェーグラーの『哲学史』(ケーベル編集のもので、ショーペンハウエルとハルトマンの項目が増補されている)のショーペンハウエルの項の結末部分に Resignation という語が見いだされることだ。これは鷗外が早くからこのドイツ語を知っていたことを示す。ただ鷗外はまさかそのような、いわば聖者的境地をこのドイツ語に託したわけではないだろう。ただ当時の鷗外の心境にはそのような境地への強いあこがれはあった。そして晩年においてそれを自己のものにして行くことになるといい。(659～660 頁)

以上のように先人によって重要視されてきた鷗外の「Resignation」について、本稿では、鷗外の創作の原動力すなわち〈精神の運動〉であり、鷗外文学史の基調をなす鍵語であることを以下に論じたい。

Ⅲ. 鷗外 Resignation の発露、同義語ないしは類似する心情表現

鷗外の心境を表現するドイツ語「Resignation」の同義語ないしは類語・関連語としては、「諦念」以外にもフランス語「résignation (レジニヤシオン)」、ドイツ語「Entsagung」、「あきらめ」「諦」「忍辱」「銜学」「ディレツタント」「傍観者」「あそび」「平氣」「樂天的」「有道者の面目」などの言葉が挙げられる。これら一連の表現は、一見、鷗外文学の主人公による「永遠なる不平家」という自己認識の対極にあるように思われる。だが、後述するように、鷗外の精神性が反映した「妄想」(『三田文学』第2巻第3号、第4号 1911年3月、4月 『鷗外全集』第8巻)における「永遠なる不平家」という自己認識は、「諦念」に繋がる「Resignation」の対極にある心境・自己認識として振幅し、そのような〈精神の運動〉こそが、鷗外の心の襞を語るとともに、彼の創作活動の糧となってきたと考えられるのである。

そのことを考察するために、再度、「諦念」という言葉の用例に立ち返りたい。

岩谷泰之は、『令和元年度 学位請求論文 森鷗外と仏教』「第一部 鷗外と仏教のかかわり 第三章「諦念」を中心に」において、「諦念」は鷗外の心境を分析する際のキー・ワードとして頻繁に用いられるが、鷗外研究においてその典拠が不明であるとされていたことに着目し、次のように論じている。

初期の使用方法はおもに「諦念」に「あきらめ」とルビを振ったものだが、「諦念」はもともと仏典で用いられた言葉であり、鷗外の弟・森篤次郎、筆名・三木竹二（1867～1908）が編集を務めた雑誌『歌舞伎新報』に同様の表現が見られる。鷗外は『日本校訂大蔵経』『大日本続蔵経』刊行後に、「諦念」を「あきらめ」と読ませたのではなく、ゲーテに関する著書の翻訳で訳語として用いている。大蔵経に触れる中で、「諦念」が仏教の言葉であることに気付いたのではないかと考えられる。鷗外はこれまでも仏教と西洋の哲学とを対置するような表現を行ってきたが、仏教によって西洋哲学を相対化したのではないかと考えられる、というのが岩谷による論究である。

実際に鷗外作品から、「諦念」に繋がる「Resignation」の心境の展開を考察してみると、まず鷗外「豊熟の時代」における「Resignation の説」の前触れとして、短編小説「追儼」（『東亜之光』第4巻第5号 1909年5月 『鷗外全集』第4巻）が挙げられる。「僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだといふ斷案を下す。」（全集588頁）という、自然主義勃興期の文壇で小説の作法を喧伝する人々に対しての鷗外の批判的立場がうかがえる一文である。当時の文壇における自然主義の主張の影響下、鷗外は自らの小説理念を堅持しようとして、このような自由の立場を提唱していると考えられる。

続く「魔睡」（『スバル』第6号 1909年6月 『鷗外全集』第4巻）には、「さてここに妙な事がある。それはいつも博士が人に迫害を蒙つた時の反應の爲方なのである。博士はかくまで不快を感じながら、磯貝を憎むといふ念は殆ど起らなかつたのである。博士の心ではかういふ時に、いつも卑む念が強く起つて、憎む念に打勝つのである。卑んで見れば、憎む價值がなくなるのである。博士は往々此性質の爲めに人に侮られる。それは憎むことの出来ないのは男らしくないのだと解釋せられるからである。それとも博士には矢張男らしい性が闕けてゐるのかも知れない。」（全集616頁）というように、相手を「卑しむ」ことによって、その相手を超越することができるという矜持が表現されており、このような心境は「予が立場」の「Resignation」と連動する。

「キタ・セクスアリス」（『スバル』第7号 1909年7月 『鷗外全集』第5巻）では、「小説は澤山讀む。新聞や雑誌を見るときは、議論なんぞは見ないで、小説を讀む。併し若し何と思つて讀むかといふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのではない。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そ

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

こいら中にある小説は此要求を充たすに足りない。金井君には作者がどういふ心理的狀態で書いてゐるかといふことが面白いのである。」（全集 85～86 頁）というくだりがあり、小説に関する「非常に高い要求」というのは、主人公・金井湛が以前より抱いていた〈美の理想〉に合致することを意味している。当時の鷗外が、自分自身の作品について、自らの「非常に高い要求」を満たす「藝術品」と認め得ず、そのために「寂寥」を感じ、自分は「ディレクタント」として終わるのではないかと感じることを「永遠なる不平家」として表現していたことと対応する。

また、「キタ・セクスアリス」では、主人公・金井湛が二十歳の冬に『自由新聞』に寄稿した自身の文章について、次のように述べている。

僕の書いたものは、多少の注意を引いた。二三の新聞に尻馬に乗ったやうな投書が出た。僕の書いたものは抒情的な處もあれば、小さい物語めいた處もあれば、考證らしい處もあつた。今ならば人が小説だと云つて評したのだらう。小説だと勝手に極めて、それから雑報にも劣つてゐると云つたのだらう。情熱といふ語はまだ無かつたが、有つたら情熱が無いとも云つたのだらう。銜學なんといふ語もまだ流行らなかつたが、流行つてゐたら此場合に使はれたのだらう。その外、自己辨護だなんぞといふ罪名もまだ無かつた。僕はどんな藝術品でも、自己辨護でないものは無いやうに思ふ。それは人生が自己辨護であるからである。（中略）僕は幸にそんな非難も受けなかつた。僕は幸に僕の書いた物の存在權をも疑はれずに済んだ。それは存在權の最も覺束ない、智的にも情的にも、人に何物をも與へない批評といふものが、その頃はまだ發明せられてゐなかつたからである。（全集 163 頁）

すなわち、金井湛も世間から受ける「批評」に対して「Resignation」の立場をとっており、〈Resignation 小説〉の諸作品が「自己辨護」と指摘されたことを受けて、「予が立場」ではむしろ芸術作品における「自己辨護」は当然であると主張していることが確認されるのである。

同時に、「キタ・セクスアリス」の末尾に記された金井湛の心中も、鷗外の〈精神の運動〉を考察する上で重要な記述となっている。すなわち、「自分は少年の時から、餘りに自分を知り抜いてゐたので、その悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまつたのである。（中略）併し自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけの事である。永遠の氷に掩はれてゐる地極のそこにも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。」（全集 178 頁）という金井湛の告白である。

また、鷗外の小倉時代が題材となっている「鷄」（『昂』第8号 1909年8月 『鷗外全集』第5巻）では、「垣の上の女は雄辯家ではある。併しいかなる雄辯家も一の論題に就いてしやべり得る論旨には限がある。垣の上の女もとうとう思想が涸渴した。察するに、彼は思想の涸渴を感ずると共に失望の念を作すことを禁じ得なかつたのであらう。彼は経験上こんな雄辯を弄する度に、誰か相手になつてくれる。少くも一言くらゐ何とか言つてくれる。さうすれば、水の流が石に觸れて激するやうに、辯論に張合が出て来る。相手も雄辯を弄することになれば、旗鼓相當つて、彼の心が飽き足るであらう。彼は石田のやうな相手には始めて出逢つたであらう。そして暖簾に腕押をしたやうな不愉快な感じをしたであらう。彼は「えゝろも、今度來たら締めてしまふから」と言ひ放つて、境の生垣の蔭へ南瓜に似た首を引込めた。結末は意味の振つてゐる割に、聲に力がなかつた。」（全集345頁）というように、ここでは隣家の「女」による主人公・石田への罵詈雑言を描き、批判・非難する者への無反応・無抵抗という態度の推奨がなされている。

このように、創作活動復帰における鷗外の一連の作品の基調となっている心情が、「Resignation」と重なっている。「予が立場」の発表されたのは明治42（1909）年12月であり、鷗外は自己または自己の分身を主人公とした一連の短編・中編小説執筆の最中に、自らの置かれた状況や抱いた心境を「Resignation」という言葉で明示したと考えられるのである。

「予が立場」発表以降の作品である「杯」（『中央公論』第25巻第1号 1910年1月 『鷗外全集』第6巻）では、自然主義の流行作家を指している「七人の娘」が、それぞれ「自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯」を持つてゐるのに対し、鷗外を表す「第八の娘」は「小さい溶巖色の黒ずんだ杯」を持っている。「東洋で生れた西洋人の子か。それとも相の子か。」（全集86頁）、「第八の娘は兩臂を自然の重みに垂れて、サントオレアの花のやうな目は只ぢいつと空（くう）を見てゐる」、「慍（あはれみ）の聲」を以て「あたいのを借（ママ）さうか知ら。」（全集88頁）と言ひ合う「七人の娘」から差し出された「自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯」を辞退して、「第八の娘」は、「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます」と「沈んだ、しかも鋭い聲」で、唯一度口を開いた。この娘の言語は、七人の娘には通じなかつたが、「第八の娘の態度は第八の娘の意志を表白して、誤解すべき餘地を留めない」（全集89頁）とされている。まさに、「予が立場」に記されていた鷗外の心境の寓意的表現であると言えるだろう。

また、寓意性ということでは、続く「木精」（『東京朝日新聞』1910年1月16日、17日 『鷗外全集』第6巻）も同系列の作品である。

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

鷗外自身の立場を表現する主人公フランツは、自分の呼び声に木精が答えてくれなくなり、新しく現れた七人の子供たちの声には木精が響くことで、初めは木精が死んだのかと思うがそうではなかった。「木精は死なない。併しもう自分は呼ぶことは廢さう。こんど呼んで見たら、答へるかも知れないが、もう廢さう。」と、フランツは木精の答をあきらめる。そして、〈あきらめの心境〉を象徴するかのやうに、「闇が次第に低い處から高い處へ昇つて行つて、山々の巔は最後の光を見せて、とうとう闇に包まれてしまった。村の家にちらほら燈火が付き初めた。」（全集 248 頁）と記される。

この作品の舞台になっている清冽な山上の谷間は、「巖が屏風のやうに立つてゐる。登山をする人が、始めて深山薄雪草の白い花を見付けて喜ぶのは、こゝの谷間である。」（全集 243 頁）と描写されている。鷗外の作風の象徴であるとともに、孤高の世界に漂う〈無限の寂しさ〉が表現されていると言えるのである。

フランツが木精に耳を澄ますのは、木精の答を要求するのではなかった。フランツは木精といふものの存在を知らない。「只暖かい野の朝、雲雀が飛び立つて鳴くやうに、冷たい草叢の夕、蜚（コオロギ）が忍びやかに鳴く様に、こゝへ來て、ハルロオと呼ぶのである。併し木精の答へてくれるのが嬉しい。木精に答へて貰ふ爲めに呼ぶのではない。呼べば答へるのが當り前である。日の明るく照つてゐる處に立つてゐれば、影が地に落ちる。地に影を落す爲めに立つてゐるのではない。立つてゐれば影が差すのが當り前である。そしてその當り前の事が嬉しいのである。」（全集 243～244 頁）

この寓意性をあえて解釈するなら、鷗外にも自作への〈自然な反響〉を喜ぶ心はあったが、文壇批評家の罵詈雑言ばかり聞えるようになったことから〈無限の寂しさ〉が表現されているということではないだろうか。

続く「里芋の芽と不動の目」（『スバル』第2巻第2号 1910年2月 『鷗外全集』第6巻）では、主人公・増田博士の心情が注目される。博士は子どもの時、里芋の選り分けをして百姓に褒められたことがある。博士の兄は、母親が不動を拝んでいるのを目にし、「線香の燃えてゐる尖を不動様の目の所に押つ附つけて焼拔」（全集 256 頁）く。田口卯吉を友とし、「舊思想の破壊といふやうな事に、力瘤を入れ」た「Fanatiker」であった。弟の博士は兄と反対で、兄について、「古くなつたがらくたを取り片附けなけりやならない時代には、あんな焼けな人間も道具かもしれない」としながらも、「己なんぞも西洋の學問をした。でも己は不動の目玉は焼かねえ。ぽつぽつ遣つて行くのだ。里芋を選り分けるやうな工合に遣つて行くのだ。」（全集 257 頁）と語る。

「己は化学者になつて好かつたよ。化学なんといふ奴は丁度己の性分に合つてゐるよ。酸素や水素は液體にはならねえといふ。ならねえといふ間はその積りで遣つてゐる。液體になつても別に驚きやあしねえ。なるならなるで遣つてゐる。元子は切つたり毀したりは出来ねえ。Atom は *atemnein* で切れねえんだといふ。切れねえといふ間はその積りで遣つてゐる。切れたつて別に驚きやあしねえ。切れるなら切れるで遣つてゐる。同じ江戸つ子でも、己は兄きのやうな Fanatiker とは違ふんだ。どこまでもねちねちへこまずに遣つて行くも江戸つ子だよ。」

(全集 257～258 頁)

また、同年発表の「栈橋」(『三田文学』第1巻第1号 1910年5月 『鷗外全集』第6巻)では、旧藩主・龜井茲常伯の渡欧の際の光景が題材となっており、人々とともにハンカチを振ることのできない自分の性質を〈諦観〉している主人公が描かれている。「見送の人々の中には、栈橋のはづれまで送つて行くものもある。自分にはそんなはしたない眞似は出来ないのである。」(全集 507 頁)、「伯爵の一行を送る人々の中でも、白い物が閃くのである。自分も袂に入れて來た、バチストのハンカチイフを瘦せた指に擱んでは見たが、どうもそんなはしたない眞似は出来ないのである。」(全集 508 頁)というように、「里芋の芽と不動の目」における増田博士の兄のような「Fanatiker」の〈激情〉の否定が、世俗的な言動をとることができない〈精神的貴族性〉として描かれている。

さらに、「ル・パルナス・アンビュラン」(『中央公論』第25巻第6号 1910年6月)では、当代一流の作家の葬式に参列した人々を描いて、「歩いてゐる文壇」Parnasse ambulant の姿により、当時の日本の文壇の動向、すなわち自然主義文学運動への諧謔がなされている。行列に参加する4人の西洋人の中で、U.C.Delanature (自然主義を連想させる名前)が最も優遇され、Dr.Symbolicus (象徴主義を連想させる名前)、Mysticus (神秘主義を連想させる名前)、Dr.Neoromanticus (ネオ・ロマン主義を連想させる名前)の3人は軽蔑されていたのに対して、途中で Delanature が駆け抜け、葬列を導いて多摩川岸まで駆けさせる。4人の西洋人は行方不明となり、Delanature の名刺の代りに Diabolus (悪魔)の名刺が残される、と記されている。

ここには、谷崎潤一郎の「刺青」が第二次『新思潮』(第3号 1910年11月)に掲載されたことなど、当時の文壇が自然主義から悪魔主義に転向することについての諷刺諧謔が表現されており、この葬式で「異采を放つた會葬者」に鷗外自身が重ねられているのである。

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

自動車にも馬車にも乗ってゐないが、此男は馬に乗ってゐるのである。カアキイ色の軍服に大きい勲章を付けてゐるのは好いが、人力車の跡に附かうとして、人を載せた車と空車との間に挟まれて、馬はいれる、車夫は小言をいふ。巡查も此男の處分には困つたが、お役人に文句を言ふわけにも行かないと見えて、黙つて見てゐた。とうとう騎馬の先生は空車の跡に廻つて附いて行く。「やあい、えらい人の癖に、あんな尻の方に附いて行かあ」と、子供連が囃してゐる。（全集 22 頁）

鷗外は、文壇から厄介がられながら文壇に交わり、〈平気〉で行列の後ろ方についてゆくというように、自らの様子を自虐的に滑稽化しているのであり、このような自然主義文学隆盛に対する鷗外の諧謔は、「予が立場」の心境の戯画化であるとも言えるだろう。

また、「あそび」（『三田文学』第 1 巻第 4 号 1910 年 8 月 『鷗外全集』第 7 巻）には、官吏であり作家でもある主人公の木村が、自作についての不当な批評が新聞に掲載されていても、読後には「晴れ晴れ」とし、役所の仕事についても「あそび」の気持ちで従事していることが描かれている。

ある日、木村に応募脚本の選考を依頼した『日出新聞』の文芸欄に、彼の文学には「情調がない」という批評が掲載される。納得のゆかない木村は、審査の催促をされた際に、多忙のため急には対応できないと、少々の悪意を交えて答える。すなわち、「木村の書くものにも情調がない、木村の選擇に與つてゐる雑誌の作品にも情調がないと云ふのは、文藝が分らないと云ふのである。文藝の分らないものに、なんで脚本を選ばせるのだろう。」（全集 239 頁）、「微笑の影が木村の顔を掠めて過ぎた。そしてあの用筆笥の上から、當分脚本は降りないのだと、心の中で思つた。昔の木村なら「あれはもう見ない事にしました」なんぞと云つて、電話で喧嘩を買つたのである。今は大分おとなしくなつてゐるが、彼れの微笑の中には多少の Bosheit（悪意）がある。併しこんな、けちな悪意では、ニイチエ主義の現代人にもなられまい。」（全集 249 頁）というように、自作について容認しがたい批評がなされても悠然としている木村の対応に、「あそび」の精神が重ねられている。

すでに見た「カズイスチカ」の「résignation（レジニヤシヨン）」は鷗外が敬意の念を抱いた態度であり、「予が立場」の「Resignation」と繋がりを有する。他からの毀誉褒貶に拘泥せず、一切の批評から超越して、自己の分を守るといふ点では同様であり、相違点は「詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐる」か、「自分の氣に入つた事を自分の勝手にしてゐる」かという点であろう。鷗外自身の態度は後者であり、

これは「有道者の面目」というよりは「あそび」の精神によるものであると言ってよい。

前掲の自伝的小説「妄想」では、「全く處女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出来事に反應して、内には嘗て挫折したことの無い力を蓄へてゐた」（全集 199 頁）ベルリン留学時代、主人公は人生の「寂寞」を慰謝しようと多くの哲学書を渉獵する。「自然科学のうちで最も自然科学らしい醫學」「exact な學問」に携わっているにもかかわらず、「心の寂しさ」「心の飢」を感じ、「自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうか」という疑問を持つ。「生まれてから今日まで、自分は」「始終何物かに策うたれ驅られてゐるやうに學問といふことに齷齪してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を爲上げるのだと思つてゐる」からである。「併し自分のしてゐる事は、役者が舞臺へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎない」のではないか。「勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留學生」というのが「役」で、その「役の背後に、別に何物かが存在しなくてはならない」というように感じ始める。（全集 200 頁）

かう云ふ閱歷をして來ても、未來の幻影を逐うて、現在の事實を蔑にする自分の心は、まだ元の儘である。人の生涯はもう下り坂になつて行くのに、逐うてゐるのはなんの影やら。

「奈何して人は己を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらん。されど行爲を以てしては或は能くせむ。汝の義務を果さんと試みよ。やがて汝の價値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」これは Goethe の詞である。

日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事實を蔑ろにする反對である。自分はどうしてさう云ふ境地に身を置くことが出来ないだらう。

日の要求に應じて能事畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不平家である。どうしても自分のみない筈の所に自分があるやうである。どうしても灰色の鳥を青い鳥に見る事が出来ないのである。道に迷つてゐるのである。夢を見てゐるのである。夢を見てゐて、青い鳥を夢の中に尋ねてゐるのである。なぜだと問うたところで、それに答へることは出来ない。これは只單純なる事實である。自分の意識の上の事實である。（全集 210 頁）

主人公が歸つてゆく故郷には、自然科学の萌芽を育てる雰囲気、少なくともまだない。失望と〈諦念〉が自分を襲うにもかかわらず、自分は未來の幻影を追っている。し

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

かも自分は今、死を怖れもせず恐れもせず、〈Resignation の心境〉で人生の下り坂を下ってゆく、と記されているのである。

このように主人公の心情が記された「妄想」について、小堀桂一郎『森鷗外 日本はまだ普請中だ』（ミネルヴァ書房 2013 年 1 月）には、「ゲーテは自叙傳といふ様式の究極の性格を言ひ表すために至つて都合のよい言葉を用意しておいてくれてある。

「詩と眞實」といふのがそれである。「妄想」はつまるところ作者森が齢五十歳（數へ年）といふ節目の歳の感慨をこめて詠ひ上げた「詩と眞實」であり、思想的抒情詩である。そしてこの「詩」の中には、作者の内的閱歴に係る幾多の「眞實」が含まれてある。讀者は、その内的眞實を、一篇の長篇詩を読むのと同じ心を以て読み且つ了解しておく、といふのが最も親切な読み方だといふことにならう。」（421 頁）と正鵠を射る指摘がなされている。〈Resignation の心境〉は、鷗外自身の「詩と眞實」として理解されるのである。

前掲「あそび」の系列である「田樂豆腐」（『三越』第 2 巻第 10 号 1912 年 9 月 『鷗外全集』第 10 巻）の主人公・木村は、批評家たちによって自作への罵詈雑言を受けたエミール・ゾラ（Émile Zola 1840～1902）の「蛙を呑む」という比喻を用いて、自分の心中を表現する。新聞に自作への悪口を書かれたある朝、庭の草花の名前を調べるために、植物園の「田樂豆腐」のような札を見に出かけるが、手入れが行き届かず、札も立てられていなかったりして、目的は果たせない。しかし、子どもを遊ばせたり、本を読んだりしている人々を見て、あまり窮屈にとらえない方が良くと不平にも思わない。そして、「木村は近頃極端に樂天的になつて來たやうである」（全集 555 頁）と結ばれる。

すなわち、この作品では、批評家たちを揶揄するとともに、他者からの批評を超克するために、悔しい思いをあえて「平氣」とする、すなわち〈自ら欺く〉ことで「樂天的」な方向が志向されていると言えるのである。

それから 1 年半後に発表された随筆「サフラン」（『番紅花』第 1 巻第 1 号 1914 年 3 月 『鷗外全集』第 26 巻）は、「名を聞いて人を知らぬと言うことが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある。」（全集 462 頁）と始められ、名前は知っていたが実物を知らないままに過ごしてきた、サフランという花をめぐっての鷗外の体験と感慨が綴られている。父親の薬ダンスの引き出しに干物のサフランを見つけて以降、長年実物を見ることもなく過ごしていた鷗外が、帰宅途中、図譜の知識からサフランの球根を見つけて購入し、水やりをして花を咲かせる。一見、何の変哲もない文章のように思われる。

しかしながら、「今私がこの鉢に水を掛けるように、物に手を出せば野次馬と言う。手を引っ込めておれば、独善と言う。残酷と言う。冷淡と言う。それは人の口である。

人の口を顧みていると、一本の手の遺所もなくなる。」（全集 462 頁）という記述からは、文学者であるとともに、陸軍軍医総監まで上り詰めた鷗外の人生の他者との関わりにおける苦悩と解脱がうかがえる。「宇宙の間で、これまでサフランはサフランの生存をしていた。私は私の生存をしてゐた。これから、サフランはサフランの生存をして行くであらう。私は私の生存をして行くであらう。」（全集 462 頁）という結びの余韻に、鷗外の「Resignation」の心境が響いているのである。

また、「歴史其儘と歴史離れ」（『心の花』第 19 巻第 1 号 1915 年 1 月 『鷗外全集』第 26 巻）で、鷗外は歴史と小説との区別を説く。歴史を小説と見なさず、アポロンの観照的にとらえ、歴史と小説の違いは〈観照性〉の有無であることを明確に意識している。鷗外は史実に即し自然らしさを保つことに囚われたがゆえに、「歴史離れ」に挑戦するが、むしろその路線での創作に困難を覚えるようになる。自身の制作の方法を反省する過程で、次第に自己の創造力の減退を認めざるを得なくなる。自ら「小説」とは言えなくなった作品を書くようになり、最後には「元號考」（1921 年 4 月～1922 年 7 月 未完）のような考証学に情熱を注ぐことになるのである。

大正 5（1916）年春、陸軍軍医総監・陸軍省医務局長を退任し予備役編入となって発表された「空車」（『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』1916 年 7 月 6 日、7 日 『鷗外全集』第 26 巻）も「Resignation」の心境を表現する随筆であり、次のように記されている。

わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。（中略）

此車に逢へば、徒歩の人も避ける。貴人の馬車も避ける。富豪の自動車も避ける。隊伍をなした士卒も避ける。送葬の行列も避ける。此車の軌道を横るに會へば、電車の車掌と雖も。車を駐めて、忍んでその過ぐるを待たざることを得ない。

そして此車は一の空車に過ぎぬのである。

わたくしは此空車の行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。わたくしは此空車が何物をか載せて行けば好いなどとは、かけても思はない。わたくしが此空車と或物を載せた車とを比較して、優劣を論ぜようなどと思はぬことも、亦言を須たない。縦ひその或物がいかに貴き物であるにもせよ。

（全集 541～542 頁）

また、翌大正 6（1917）年発表の「なかじきり」（『斯論』第 1 巻第 5 号 1917 年 9

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

月 『鷗外全集』第26巻）では、「わたくしには初より自己が文士である、藝術家であると云ふ覺悟はなかつた。又哲學者を以て自ら居つたこともなく、歴史家を以て自ら任じたことも無い。唯、暫留の地が偶田園なりし故に耕し、偶水涯なりし故に釣つた如きものである。約て言へばわたくしは終始ヂレッタンチスムを以て人に知られた。」（全集544頁）と記され、さらに、「わたくしは叙實の文を作る。新聞紙のために古人の傳記を草するの人も人の請ふがまゝに碑文を作るのも、此に屬する。何故に現在の思量が傳記をしてジエネアロジツクの方向を取らしめてゐるかは、未だ全く自ら明にせざる所で、上に云つた自然科学の影響の如きは、少くも動機の全部ではなささうである。」（全集544～545頁）と綴られている。

同時期、鷗外の史伝認識が示された「觀潮樓閑話」（『帝國文學』第23巻第10号 1917年10月 『鷗外全集』第26巻）にも、「わたくしの書くものは、如何に小説の概念を押し廣めても、小説だとは云はれまい。」、「わたくしは度々云つた如く、此等の傳記を書くことが有用であるか、無用であるかを論ずることを好まない。只書きたくて書いてゐる。」（全集547頁）と記されており、鷗外の執筆活動が有用性にとらわれない内発的な営為であることが、諸作において異口同音に繰り返して語られており、鷗外における「Resignation」の心境は、彼の文学において通奏低音を奏でていると言っても過言ではないだろう。

IV. ゲーテにおける「諦念」の表現 – Entsagung

鷗外の「Resignation」の意味を考察するにあたって、ここでヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）の Entsagung（諦念）との関わりについて確認しておきたい。鷗外は、ゲーテが宗教的影響を受けたスピノザの思想が「諦念」を核としていることを、「ギョオテ傳」「フアウスト考」において指摘しているからである。

鷗外による「ギョオテ傳」（『鷗外全集』第13巻）「三十二「哲學」では、ゲーテがスピノザの「諦念」を採用したことを、次のように説明している。

次に此世界觀からどうして人生の幸福が得られるか。人間は其存在を如法に保續すべきものと、スピノザは云つた。ギョオテは此如法生活を人格（Persoenlichkeit）と稱してゐる。そんならその如法と云ふ法は何か。スピノザは理性の法を斥して言ふのである。理性は即神的理性である。神的理性は常住の價値を認めて、刹那に生じ刹那に滅する幻像の價値を認めない。ギョオテのイタリアで書いた手紙に、「己は今後常住の意義を有する事にのみ力を費したい」と云つて

ある。その反面には一時の毀誉褒貶を顧みないと云ふ**諦念 (Entsagung)**がある。一八二〇年七月九日にギョオテがシュウバルト (Schubarth) に遣った手紙に、「己は眞の存在のために世を棄てなくてはならなかつた」と云つてある。このスピノザの諦念は厭世では無い。「哲人は飽くに至らざる飲饌、芽ぐむ草木の色香、服飾、角觥、演劇等を樂む」と、スピノザは云つてゐる。ギョオテの「遺言」(Vermaechtniss)にも殆同じ詞がある。同時に哲人は憎惡、娼嫉、疑懼、悲愁を遠ざけて、善を行つて樂まなくてはならない。かうなれば人間の人間に對する行爲が神の行爲になる。(全集 439～440 頁)

このように鷗外の「Resignation」とスピノザの「諦念」には、すでに述べた相違点のみならず共通点も見出され、スピノザの影響を受けたゲーテの思想が、さらに鷗外に影響したとみなすことができる。鷗外によれば、激情が「明白にして劃定せられたる寫象」となる時、激情でなくなると説いたスピノザの処世法を、ゲーテは芸術の原理に適用しており、この立脚地から人を寛仮するやうな「自由の人」となったことなどが鷗外の心情と重なるのである。

さらに、「ギョオテ傳」「三十八 引力」では、スピノザとゲーテの「諦念」に関する叙述があり、「最初引力はキルヘルム・マイステルの遊歴時代の一部になる筈であつた。遊歴時代には**諦念 (Entsagung)**と云ふことを根本思想にした小さい話をいくつも挿むことにしてあつて、・・・」(全集 493 頁)、「自然力に全く支配せられてゐるのはエツワルトである。オチリイは道義の力で自然力に打ち勝たうとして果さなかつた。併し自然力は不可抗では無い。人はカントの範疇的命令法に率つて、スピノザの自由なる人にならなくてはならない。人はあきらめ (entsagen)なくてはならない。當時ロオマンチツク派が跋扈して、夫婦を輕んじたのに反抗して、ギョオテは引力を書いた。引力は夫婦を尊重する教である。」(全集 497 頁)と記されている。

同じく「ギョオテ傳」「四十三 キルヘルム・マイステルの遊歴時代」では、「諦念」の問題をめぐる解説として、次のような一連の表現が展開されている。

遊歴時代の精神は**勞作 (Arbeit)**と**諦念 (Entsagung)**とである。キルヘルムはナタリイ (Natalie) との幸福を措いて旅に立つ。それは今や世界的結社 (Weltbund) とならうとしてゐる。ロタリオ (Lothario)、アツベエ (Abbé) の塔中秘密結社が指圖して立たせたのである。キルヘルムは一箇所に三日以上淹留することは出来ない。社友に逢つても現在以外のことを語ることは出来ない。それは過去を語つて悔い、未來を語つて夢みることを忌むのである。(中略) キルヘルムはをぢの家で短

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

篇小説を二つ読ませられる。一つは「順禮の癡女」(Pilgernde Toerin)である。フランス文から譯したもので、戀人に欺かれて有福な家を出た貴夫人の事蹟が書いてある。下女奉公をして歩いて、自らも諦念を得、人にも諦念を勧めてゐる。

(全集 536～537 頁)

次にキルヘルムは教育縣へ往く。これは一種の無何有の郷(Utopia)である。(中略)そこで四人が一旦皆諦める。(全集 538～539 頁)

次にキルヘルムはミニヨンの故郷に往く。(中略)そこへまだ諦念の時期にゐるヒラリイと未亡人とが来る。(中略)そこでヒラリイに懸想してゐた畫家が諦念の人となる。

レナルドオも諦念の人になつて、ナホヂイネの事を思い切つて、世界的結社に投ずる。アメリカに持つてゐる地所が、アツベエの管理してゐる社有の地面と隣接してゐるので、其界に運河を掘つて、殖産の發展を謀る。(全集 539～540 頁)

そこへレナルドオが来る。ナホヂイネとレナルドオとは一見して戀仲になる。技師は諦める。併しレナルドオもナホヂイネを娶らうとは云はずに去る。とうとう三人共諦めるのである。(全集 541 頁)

理髮師は諦念が出来ぬので幸福を失つて、それから心を改めて組に入つた。レナルドオは沈黙を條件として入れて遣つた。レナルドオの許を受けなくては物が言はれぬのである。それからは諦念が集中(Konzentration)になり、集中が力量(Kraft)になつた。(全集 542 頁)

オドアルドオは或る諸侯の姫君に戀をしてゐたが、それを諦めて某大臣の娘と夫婦になつて、田舎に住んでゐた。然るに妻が不實をしてゐたのが分かる。同時に姫君に出逢つて戀が再燃する。此關係は途中までしか書いてないが、オドアルドオはそれから一切の事を諦めて、殖民事業に全力を注ぐことになつたらしい。

(全集 542～543 頁)

また、鷗外が「ギョオテ傳」を執筆する際に依拠したビールショウスキー(Albert Bielschowsky 1847～1902)のゲーテ傳(*Goethe. Sein Leben und seine Werke* 1895-1903)については、渡邊格司 訳『ゲーテ評傳』(森北書店 1943～1946 年)下

卷ノ二に、次のように記されている。

放浪時代を貫く二大根本思想は仕事と諦念である。諦念には多くの意味がある。それは限定と集中である。人間はその努力を限定して有限の領域内に於いて全力を集中すべきである。諦念とはあらゆる情慾の克服を意味し、先天的乃至は後天的の多様な利益、権利、財物の放棄を意味する。諦念は本能的人間と生成の中に深く關與するがため、ゲーテにとつては仕事と共に最も重要な生活原理であつた。それ故にゲーテは榮えある個人生活と共同生活の基礎を問題として扱つた此の小説に『諦念者』という副題を與へた。(623～624 頁)

このように、ゲーテの「諦念」は情欲的なものの放棄を意味し、消極的・静的な〈断念〉ではなく、ある目的を持つ道のために、その妨げとなる欲望を放擲し、力を集中して目的に向かって努力することを表現している。具体的に『キルヘルム・マイステルの遊歴時代』(*Wilhelm Meisters Wanderjahre*) の場合は、恋愛の情欲を〈断念〉して、アメリカ合衆国で理想的な民主的社会を実現するための結社を作ることであり、人道的社会の創設をめざす努力を意味している。この「Arbeit」(労作・仕事)のための「Entsagung」(諦念)が提唱され、欲望を抑えて社会での現実的な役割に目覚め、有用な仕事に専心することが謳われているのである。

また、『キルヘルム・マイステルの遊歴時代』の副題である「諦念の人々」(*Die Entsagenden*)は、「諦念」と訳されてはいるが、語としては「Resignation」ではなく「Entsagung」が用いられている。このことから、「予が立場」における鷗外の「Resignation」は、「Die Entsagenden」に対応するとは言えないのではないか。鷗外の「Resignation」とスピノザの「諦念」を、まったくの同義と見なすことはできないにしても、やはり鷗外の「Resignation」は、前掲「ファウスト考」「第十二章 離合」「一 獨言」でスピノザ主義の説明として使っている「諦念(Resignation)」に由来すると考えられるのである。

V. 鷗外の創作活動における Resignation の意義

以上、本稿では、鷗外の精神性を表現する文学作品において、「Resignation」という心境や態度を表現する鍵語がどのように用いられているか、また、鷗外の「Resignation」について先行研究ではどのように論じられているかを確認した。続いて、明治末年から大正期にかけての「豊熟の時代」における鷗外の小説・随筆をおもな対象として、鷗外

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

の「Resignation」の心境や態度が具体的にどのように表現されているかを考察するために、「Resignation」の同義語ないしは類似する心情表現を追尋した。さらに、「Resignation」の関連語の一例として、鷗外が翻訳したゲーテ作品における「諦念」の表現「Entsagung」の意味合いについて論及し、鷗外の「Resignation」を相対化することを試みた。

最後に、「Resignation」の心境や態度、およびそれらに対応する表現によって鷗外文学が展開されたことを踏まえ、「Resignation」が鷗外文学の原動力、すなわち鷗外の〈精神の運動〉であり鷗外文学史の基調をなす鍵語であるという、鷗外の創作活動における「Resignation」の意義について述べておきたい。

明治40年代から大正期にかけての「豊熟の時代」に限らず、明治20年代の創作活動初期から、鷗外作品の根底をなす観念ないしは主要動機について検討すると、主要人物の〈断念〉という行為や、恋愛ないしは恋愛に繋がる感情が成就されない結末が不可避であることが瞭然としている。「舞姫」の太田豊太郎は帰国しての立身出世のためにエリスとの愛を〈断念〉し、「うたかたの記」ではマリイの死によって、「文づかひ」（『新著百種』第12号 1891年1月）ではヒロインの宮仕えによって、主人公たちはその恋愛感情を成就することなく終わる。

また、「雁」（『スバル』第3年第9号～第5年第5号 1911年9月～1913年5月、「式拾式」～「式拾肆」は単行本『雁』（1915年5月）刊行時に加筆）の岡田は、洋行のためにお玉の思慕を斥ぞけ、「安井夫人」（『太陽』第20巻第4号 1914年4月）の佐代は、夫の偉業への内助を全うすべく自身の美貌を顧みず、「山椒大夫」（『中央公論』第30年第1号 1915年1月）の安壽は、弟厨子王を救済し一家の再起繁栄を期するために我が身を犠牲にする。

ドイツ三部作と「雁」には執筆時期に20年の隔たりがあるが、いずれも主要人物自身の人生や恋愛の〈断念〉による物語となっている。一方、鷗外自身は、陸軍軍医総監になるために小説・戯曲を書くという文学活動自体を〈断念〉したわけではない。太田豊太郎や岡田は恋愛のために無限の悲哀を抱き、鷗外は文学との関わりにおいて「永遠なる不平家」となったのである。すでに見たように、鷗外の「Resignation」はその「不平」を慰撫するための「Resignation」であって、ゲーテが描いたような「仕事」「勞作」のために情欲を〈断念〉〈放棄〉するという意味ではないことは明らかである。

次に、鷗外文学史の基調をなす観念ないしは主要動機を検討するために、本稿冒頭に掲げた鷗外の文学活動初期の文章「鷗外文話」の記述を再掲しておきたい。「文話」とは、『日本国語大辞典』（小学館 第二版 第11巻 2001年11月）によれば、「文章や文学に関する談話、批評」（1159頁）であって、和田英信「〈文話〉について—〈文章

読本〉源流小考」(『イニシアティブ』平成 18 年度活動報告書・海外研修事業編 2007 年)に、「文話」とは「創作の前提としての文章論」であり、「文学論・文章論一般と異なるのは、あくまでも創作の参考のためのものとして、啓蒙的な立場から書かれていることである。」(277 頁)と論じられている。

「鷗外文話」は、前述のように、「あづまや」「盲帝の曲」「今の英吉利文学」「白壁の微瑕」「ドオデエ」「地震の作者」「大家」「鬼才」「詩句霸王樹の如し」「小説中人物の模型」「毒を以て毒を制す」の 11 編で構成され、明治 24 (1891) 年 5 月 25 日発行の雑誌『柵草紙』第 20 号に「鷗外文話」の総題のもと掲載(『鷗外全集』第 22 巻)されている。

そのうち「小説中人物の模型」(『しがらみ草紙』第 20 号 1891 年 5 月 25 日「鷗外文話」「其十、小説中人物の模型」)(原題・出典: Iwan Turgeneff: *Väter und Söhne*. Nachwort des Verfassers. Deutsch von W.Lange.Reclam.)に、次のような記述がある。

ツルゲエネフが小説親々と子供とといふ書は、魯西亞にて始めて虚無主義といふ文字を用ゐたる珍しき著作なり。作者は此書によりて蒙りし多くの攻撃を、しばらくは甘じ受けて反駁せんとせざりしが、後に彼小説を改板せしとき、自ら跋を作りて嘲を解きぬ。(中略) わが小説を作るときは、いまだ先づある理想を得て業に就きしことなし。われは必ず先づ實在の人物を得るなり。さてこの人物に適ふやうなる性質次第に集まりて、遂にその一身に融合す。われ生れながらにして空に憑りてものを見出す能少し。故に先づ堅き地を得し上ならでは、自在に運動すること能はず。親々と子供との一篇も亦然り。(全集 493 頁)

ツルゲエネフが言葉のゾラがドオデエを評せし語に似たることは既にいひしが、ドオデエも亦た 小説を著すとき多く先づ實在の人物を得て、これを模型としたりといふ。(全集 494～495 頁)

引用したのは、ツルゲーネフ (Ivan Sergeevich Turgenev 1818～83)『父と子』(1862 年)の跋文に記された、創作に関するツルゲーネフ自身の感慨のくだりである。農奴解放前後の 1860 年代における古い貴族的文化と新しい民主的文化の思想的相剋を描いたこの作品について、ツルゲーネフは自身の小説作りの実態を述べ、フランスのアルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet 1840～97) も同様に、「小説を著すとき多く先づ實在の人物を得て、これを模型」(全集 495 頁)としたと記している。

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

上の引用文は、『父と子』のドイツ語訳を読んだ鷗外が、ツルゲーネフの言葉を借りて自らの小説作りに関する認識を語っていると受け止められる。鷗外文学史の原点が示されているとともに、最晩年にいたるまでの鷗外の小説創作の奥義が示されていると考えられるからである。鷗外の創作の基盤として「實材の人物」があり、鷗外は「空に憑りてものを見出す能」の不足を自覚した上で、創作活動に従事していたのではなかったか。そのような鷗外の創作の原動力となったのが「Resignation」の心境であったと考えられるのである。

本稿「Ⅲ. 鷗外 Resignation の発露、同義語ないしは類似する心情表現」において考察したように、陸軍軍医総監・陸軍省医務局長時代、文壇での自然主義隆盛期、ジャーナリスト（文芸批評）の〈誹謗〉の対象となった鷗外の「Resignation」は、外部の世界（文壇）との交渉に関わらないという、自らの立ち位置・心境を表現していた。当時の文壇における自然主義の主張の影響下、鷗外は小説についての自らの理念を堅持しようとして、融通無礙の立場を提唱していた。

実際に、鷗外は短編・中編小説において、〈本能的自我〉の〈諦観〉と〈超克〉とによって、自分自身の〈分身〉を描く。自然主義文学に対する鷗外の諧謔は、文壇から厄介がられながら文壇に交わっているという自己認識のもと、「平氣」で行列の後ろについてゆく様子を戯画化していた。悔しい思いをあえて「平氣」とすることで、「樂天的」な方向を志向していたと言えるのである。

すでに見たように、「カズイスチカ」の「résignation（レジニヤシヨン）」は、鷗外が敬意の念を抱いた態度であり、他者からの毀誉褒貶に拘泥せず、一切の批評から超越して自己の分を守るという点では「予が立場」の「Resignation」と通い合う。相違点は「詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐる」か、「自分の氣に入つた事を自分の勝手にしてゐる」かであり、鷗外の自己認識は后者であり、「有道者の面目」というよりは「あそび」の精神に繋がる。

また、小説に関する鷗外の「非常に高い要求」は、主人公が以前より抱いていた〈美の理想〉に合致し、自身の作品について自らの「非常に高い要求」を満たす「藝術品」と認め得ず、そのために「寂寥」を感じ、自分は「ディレッタント」として終わるのではないかと感じることを「永遠なる不平家」として表現していた。

さらには、鷗外の「Resignation」は、政治家の素質を有するゲーテのように、事業・行為のために障害になるものを〈断念〉（Entsagung）するという意味は稀薄であり、厳密にはスピノザのような宗教的な「諦念」でもなかった。「傍觀者的」な「あそび」、すなわち余裕というポーズとしての「Resignation」であったと言える。

顧みれば、鷗外が翻訳した「ファウスト」第二部 第五幕「夜半の刻」の場面は、自

らの限界を認識し不可能なことを受け入れるファウストが、最後に到達した〈自由〉と〈救済〉がもたらされる「諦念」が表現されていたことも想起される。

明治末年以降の鷗外は、「かのやうに」（『中央公論』第27巻第1号 1912年1月）、「吃逆」（『中央公論』第27巻第5号 1912年5月）、「天寵」（『アルス』1915年4月）、「高瀬舟」（『中央公論』第31巻第1号 1916年1月）、「寒山拾得」（『新小説』第21巻第1号 1916年1月）など、宗教的背景を想起させる諸作品を継続して創作していたことも思い合わされる。

本稿冒頭で挙げた漱石との比較で言えば、鷗外も漱石も創作活動の初期は浪漫的・理想的立場を示したが、晩年には倫理的・宗教的方向に向かい、もはや美学的方法ならぬ精神主義的傾向によって、彼らの文学に「新理想主義」をもたらすことになったということではなかったか。だが、鷗外の「Resignation」と漱石の「則天去私」は、あくまでもそれぞれ独立した心境表現であり、その上で相呼応していると見るべきであろう。

具体的に鷗外の歴史小説においては、歴史的人物の中に犠牲的・献身的意志が見出され、〈自我を超克する自我〉という〈理想主義的自我〉が作品化されている。また、『青年』（『スバル』第2巻第3号～第3巻第8号 1910年3月～1911年8月）における大村の「利他的個人主義」の具体化や、歴史小説における人間の理想化は、近代的な「利他的個人主義」や「自我の覚醒」の象徴であり、鷗外の描く「自我の醒覺」は個人主義にも社会主義にも偏向せず、超個人的すなわち〈利他的自我〉の方向に向かう。鷗外においては、意志的熱情は憧憬されるものの〈寂靜〉の自我が志向されることになるのである。

鷗外の史伝における主人公も、またその生き方を「觀照」する鷗外自身も、あたかも自我自体が沈靜化されたかのように見える〈寂靜〉の境地に近い心境を示している。ニーチェの〈超人〉にも仏教の〈解脱者〉にも重なりを見せながら、その方向には偏向せず、一種の「利他的自我」が構築されてゆくのである。

そのような〈解脱〉にも連なる〈寂靜〉の境地は、次のような鷗外の執筆態度にも反映している。「わたくしは度々云つた如く、此等の傳記を書くことが有用であるか、無用であるかを論ずることを好まない。只書きたくて書いてゐる。」（「觀潮樓閑話」『鷗外全集』第26巻 547頁）や、「材料の扱方に於て、素人歴史家たるわたくしは我儘勝手な道を行くことゝする。路に迷つても好い。もし進退維れ谷まつたら、わたくしはそこに筆を棄てよう。所謂行當ばつたりである。これを無態度の態度と謂ふ。無態度の態度は、傍より看れば其道が險惡でもあり危殆でもあらう。しかし素人歴史家は樂天的である」（『伊澤蘭軒』その三 『鷗外全集』第17巻 7頁）というように、鷗外の「樂天的」とも言える執筆態度が述べられている。

〈Resignation〉による森鷗外の創作力
——「鷗外文話」から史伝まで——

晩年の鷗外はもはや〈文学論争〉に情熱を注ぐことはなく、科学と神話・宗教との関係に関心を示す。『澠江抽齋』（『大阪毎日新聞』1916年1月13日～5月17日、『東京日日新聞』1916年1月13日～5月20日）をはじめとする史伝、「元號考」（1921年4月～1922年7月 未完）に至るまでの科学的著述、「禮儀小言」（『東京日日新聞』1918年1月1日～10日、『大阪毎日新聞』1918年1月5日～14日）、「古い手帳から」（『明星』第1巻第1号～第7号、第2巻第1号、第2巻第2号、1921年11月～1922年5月、6月、7月 未完）のような社会的な関心のもとでの時事的課題の考察を発表して、その重厚濃密な生涯を終える。

改めて、鷗外の「Resignation」とは何か一。すでに見たように鷗外文学における一連のキー・ワード「銜学」「ディレッタント」「傍観者」「あそび」「平気」「楽天的」と、それに対して「永遠なる不平家」であることは、本来、両義的であると言わざるを得ない。実際に、鷗外が自らの文学を「情調がない」と指摘されたことへの過剰な反応がその両義性を証明していると言えよう。結果として、鷗外の「自ら欺く」韜晦的な在り方が、彼自身に「寂寥感」をもたらすことになる。

鷗外が魂の打ち震える状態への憧憬や感興を抱きながらも、それを作品化しない、ないしはできないという自己認識がもたらす「諦念」を表現すること一、それは自分自身の置かれた状況が醸成する自らの心境に満足しているわけではないが、契機としてその心境を受け入れ、その矛盾・葛藤をより高い段階で生かし、発展的に統一するという鷗外の精神の道筋を浮き彫りにする。まさに鷗外文学の真骨頂は、〈自律性〉を有し、〈止揚、揚棄、Aufheben〉する〈観照〉の文学と捉えることができるのではないだろうか。

「Resignation」は鷗外が自分自身の資質や能力を熟知した上で、それを十全に生かす方向性を示した鍵語であると言える。「鷗外文話」「其十、小説中人物の模型」に記されていた、「空に憑りてものを見出す能」に恵まれていなくとも、「堅き地」（歴史）の獲得によって「自在に運動する」〈観照〉の文学が生み出されたのである。鷗外における〈精神の運動〉がもたらした「Resignation」の創作力と題する所以である。

付言ながら、鷗外によって用いられたドイツ語「Resignation」と日本語「諦念」の微妙な差異については、本稿では〈止揚（動的）〉する「Resignation」と〈受容（静的）〉する「諦念」というように、そのニュアンスの相違を記すにとどめる。両語の差異に関する本質的な解釈については別稿を期したい。

【参考文献】

- ・ 中村元 監修『新・佛教辞典』（誠信書房 1962 年）
- ・ 岡崎義恵『鷗外と諦念』（宝文館出版 1969 年 12 月）
- ・ 三島由紀夫「解説」（『日本の文学 2 森鷗外（一）』中央公論社 1966 年 1 月）
- ・ 小堀桂一郎『森鷗外 日本はまだ普請中だ』（ミネルヴァ書房 2013 年 1 月）
- ・ 清水孝純「Resignation（レジニアション）」（平川祐弘 編『森鷗外事典』 新曜社 2020 年 1 月）
- ・ 岩谷康之『令和元年度 学位請求論文 森鷗外と仏教』「第一部 鷗外と仏教のかかわり 第三章「諦念」を中心に」
- ・ 渡邊格司 訳『ゲーテ評傳』（森北書店 1943～1946 年）

なお、鷗外の文章の引用は、岩波書店版『鷗外全集』全 38 巻（1971 年 11 月～1975 年 6 月）に拠った。

※ 本稿は、2022 年 6 月 4 日（土）オンラインで開催された日本近代文学会関西支部 2022 年度春季大会シンポジウム「特集 鷗外をひらく—森鷗外没後 100 年」での発表を基にしている。貴重なご意見をいただいたご参加の皆様に、心よりお礼申し上げます。

※ 本稿は、令和 2 年度～4 年度 科学研究費補助事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）（一般））「〈文化主義〉による〈国民文化〉と〈地方文化〉の展開——嶺雲・小波・竹風を中心に」（課題番号 20K00339）の成果の一部である。